

# 蔵持境遺跡

蔵持高齢者いこいの家建設に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 74 集

2001

前原市教育委員会



くらもちさかい  
蔵 持 境 遺 跡

蔵持高齢者いこいの家建設に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 74 集

2 0 0 1

前原市教育委員会





a. I区2号溝出土白磁管耳花生



b. I区2号溝出土白磁管耳花生



## 序

前原市は、古代より、北部九州における大陸文化の門戸として、わが国の歴史を学ぶ上で、数々の重要な足跡を残して栄えた地域であります。古くは江戸時代天明年間、青柳種信の『柳園古器略考』によって紹介された三雲南小路遺跡・井原彌清遺跡などの弥生時代の王墓をはじめとして、弥生時代の多数の木製品を出土し、当時の庶民の生活を浮き彫りにする上鑑子遺跡、日本最大の径を誇る内行花文鏡など約40面もの青銅鏡を出土した謎多き平原遺跡、北部九州の円墳のなかでも最大級の径を誇る釜塚古墳、7世紀代に築城された古代山城の雷山神籠石、古備真備が最初に専当官となって天平勝宝8年（756）から神護景雲2年（768）まで約12年の歳月を要して築城された古代山城の怡土城、その怡土城を再利用して築城された中世山城の高祖城など、周知の遺跡はいうまでもなく、現在でも市内には数多くの大切な文化財が眠っています。

蔵持地区も、その例にもれず、今回の発掘調査によって多くの遺跡の所在を確認でき、当該地区周辺に弥生時代から人々が生活を営んでいたことが判明しました。また蔵持地区の弥生時代から戦国時代にかけての状況を解明するための情報および資料の蓄積がなされたということで、非常に意義のある調査となったようです。本書が、当該地区の学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査を行うにあたりましては、各方面から御指導、御協力をたまわりました。関係各位の御理解、御協力に厚くお礼申し上げます。今後とも、文化財保護活動に格別の御配慮、御協力をたまわりますようよろしくお願いいたします。

平成13年3月31日

前原市教育委員会  
教育長 三嶋 利彦

# 例言

1. 本書は「雷山高齢者いこいの家」建築に先立ち、前原市教育委員会が平成12年度に実施した蔵持境遺跡の発掘調査報告書である。
2. 蔵持境遺跡は福岡県前原市大字蔵持字境857-3,860-1に所在する。
3. 調査は瓜生秀文が担当した。
4. 本書の編集・執筆は瓜生が行った。
5. 本書に使用した遺構実測図は瓜生が作成した。また、製図には瓜生があたった。
6. 本書に使用した遺構・遺物写真は瓜生が撮影した。遺構の全景写真撮影は空中写真企画（有）に委託した。
7. 遺物の整理にあたっては、大庭康時氏（福岡市教育委員会）・森本朝子氏（福岡市教育委員会）の各氏からご教示を賜った。遺物の実測にあたっては山崎賀代子氏のご協力を賜った。
8. 本書で用いた方位は、実測図・本文ともに磁北を用いている。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査報告	5
1. 調査の概要	5
2. 調査の記録	5
(1). I区	5
(A). 甕棺	5
(B). 掘立柱建物	7
(C). 1号溝	9
(D). 2号溝	9
(E). I区柱穴群出土遺物及びその他の遺構出土遺物	12
(2). II区	14
(A). 土塼	14
(B). II区柱穴群出土遺物	14
(3). I区・II区の表上採集遺物	15
IV. おわりに	17



## 挿図目次

第1図. 蔵持境遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第2図. 蔵持境遺跡周辺の地形 (1/5,000)	4
第3図. 調査区位置図 (1/300)	6
第4図. 甕棺出土状況及び甕棺実測図 (1/20, 1/8)	7
第5図. 掘立柱建物及びその出土遺物 (1/80, 1/3)	8
第6図. 1号溝土層断面図と出土遺物 (1/20, 1/4)	9
第7図. 2号溝出土白磁管耳花生実測図 (1/2)	9
第8図. 2号溝実測図及びその出土遺物 (1/80, 1/6, 1/3)	10
第9図. I区柱穴群出土遺物及びその他の遺構出土遺物 (1/3, 1/6)	13
第10図. 土塙実測図及びその出土遺物 (1/20, 1/3)	14
第11図. II区柱穴群出土遺物 (1/3)	15
第12図. I区・II区の表土採集遺物 (1/3)	16
第13図. 波多江遺跡遺構図(戦国期) (1/600)	19
第14図. 蔵持古屋敷遺跡遺構図(室町～戦国期) (1/250)	19

## 図版目次

巻頭図版	a. I区2号溝出土白磁管耳花生
	b. I区2号溝出土白磁管耳花生
図版1	a. I区・II区全景
	b. I区全景
図版2	a. 甕棺出土状況(北より)
	b. 掘立柱建物
図版3	a. 1号溝全景(南より)
	b. 1号溝土層断面(南より)
図版4	a. 2号溝全景
	b. 2号溝出土白磁管耳花生
図版5	a. 掘立柱建物出土遺物
	b. 1号溝出土遺物
	c. 2号溝出土遺物
	d. I区柱穴群出土遺物
図版6	a. II区全景
	b. II区土塙全景(東より)

- 図版 7    a. II区上墳出土遺物  
          b. II区柱穴群出土遺物  
          c. I・II区表上採集遺物
- 図版 8    a. 蔵持古塚敷道跡2号溝（東部）  
          b. 蔵持境遺跡より高祖城を望む（西より）

## 付図目次

- 付図 1    I区遺構実測図（1／75）
- 付図 2    II区遺構実測図（1／75）

# I. はじめに

## 1. 調査にいたる経過

前原市民生部介護保健課において、平成12年度事業として介護予防拠点整備事業が計画された。この事業は高齢者の健康の増進や教養の向上を図るためのふれあいプラザを整備し、高齢者が要介護状態になったり、状態がさらに悪化することを予防するための事業等に施設を活用することによって、介護保健制度の円滑な実施を図ることを目的としている。その事業の一環として「甬山高齢者いきこの家」の建築が計画されたのである。

この「甬山高齢者いきこの家」建設計画に基づいて、平成12年4月13日に介護保健課から埋蔵文化財発掘の通知が文化課に提出された。これを受けた文化課は平成12年5月9日に試掘調査を実施し遺構を確認したため、再度発掘調査についての協議を行った。計画では平成12年12月からの工事着工が予定されていたために、発掘調査を平成12年9月11日から開始し、平成12年11月17日に終了した。

## 2. 調査の組織

本調査における組織の構成は以下のとおりである。

調査主体 前原市教育委員会

担 当	教育部・文化課	
総 括	教育長	三嶋利彦
	教育部長	有田穂之
	文化課課長	松井 昇
	文化課参事	小池史哲
	文化課係長	林 覚
庶 務	文化振興係長	藤井正信
調 査	文化課主査	瓜生秀文

### 調査作業員

大嶋小夜、小金丸勲雄、川上久美子、川上豊子、立山ミヨ子、中田朋子  
藤木和子、溝口英太郎、溝口ヨシノ、川崎恭平、塩田純子、原田静枝  
青木輝代、市丸千賀子、米山八重子、徳永美根子、牧井定代、藤木綾子  
原口マツノ、杉本美知子、高橋マツ子、堀田 昇、谷山セツ子、

### 整理作業員

末益真奈美、檜崎尚子

## Ⅱ. 位置と環境

蔵持境遺跡は雷山から伸びる丘陵上に位置する。当遺跡の北側約200mには熊野神社があり、その本殿裏の丘陵最高所に有田1号墳が所在する。この有田1号墳が所在する丘陵の北側には、上鎌子遺跡群があり、弥生時代後期と古墳時代後期の集落の分布が認められる。その弥生時代後期の集落からは多くの貴重な木製品が出土し<sup>1</sup>、当時の生活状況をうかがうことができる。

東に目を向けると、怡上平野が広がる。この怡上平野には、奈良から平安時代にかけて条里制が施行されたと考えられている<sup>2</sup>。当遺跡周辺一帯は大野郷に比定され、付近の小字名に「夏日」とあるのは長治2年(1105)の史料にある「策東」の遺称とする説もある<sup>3</sup>。さらにその東側には曾根丘陵があり、平原遺跡を中心とした曾根遺跡群が所在する。

南に目を向けると、蔵持古屋敷遺跡・蔵持蔵持遺跡が所在する。蔵持古屋敷遺跡は古墳～戦国時代にかけての複合遺跡であり、なかでも一辺約30mの方形を呈し、V字形の大溝(幅約3m、深さ約1.5m)を伴う14世紀～15世紀代の屋敷跡を検出している。蔵持蔵持遺跡も弥生～戦国時代にかけての複合遺跡であり、ここからも蔵持古屋敷遺跡とほぼ同時期と考えられる方形を呈し、V字形の大溝を伴う屋敷跡を検出している。蔵持境遺跡からも弥生～戦国時代にかけての遺物が出土することから、蔵持境遺跡周辺一帯には室町～戦国時代にかけての屋敷群が所在したと想定される。

さらに奥づまった南側には雷山がそびえたつ。その雷山の中腹、標高400～480mを測る2つの尾根に挟まれた緩やかな勾配の沢筋に雷山神籠石が所在する。この雷山を含み西日本には十数箇所の神籠石式山城の分布が確認されている。今日まで、一部の神籠石で発掘調査が実施されている。その結果、7世紀代に築城されたと考えられているがいまだ不明な点が多い。なお、築城年代に因して「日本書紀」敏達12年条における百濟から召喚された日羅の「毎於要害之所、堅築壘塞矣」という奏言に注目して敏達12年(538)を上限とする説がある。また、「日本書紀」斉明紀4年の末尾是歳の条における「以兵士甲卒陣西北畔。繕修城柵断山川」という記述から「以兵士甲卒陣西北畔」の部分で齊明天皇の西征、「繕修城柵断山川」の部分で神籠石式山城築城と解釈し、斉明4年(658)を神籠石式山城の築城年代とする説もある。この雷山は中世においても山城が築城される軍事拠点であり、同時に「雷山二行坊」のいわれ通り雷山には多くの僧坊がおかれていた。このことから、古代～中世にかけて軍事のみならず宗教(真言宗)の一大拠点にもなったことがわかる。現在、大悲王院につたわる古文書がそのことを物語る。

### 参考文献

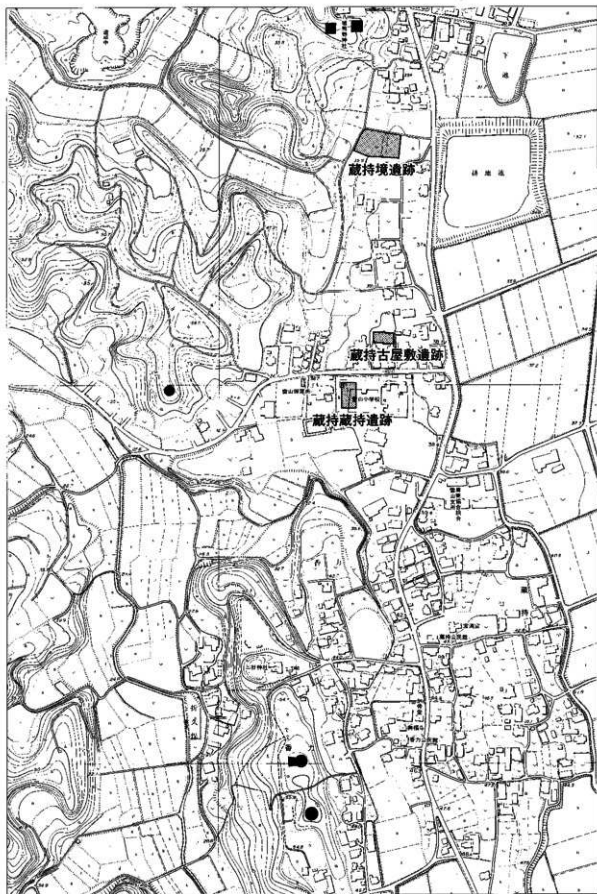
1. 岡部裕俊・野田純子編「上鎌子遺跡―出土木製遺物の概要―」(前原市教育委員会・1996年)
2. 日野尚志「筑前国怡土・志麻郡における古代の歴史地理学的研究」  
(『佐賀大学教育学部論文集』第20集・1972年)
3. 『府老藤原延未田地賣券』(『平安遺文』古文書編第4巻・1501頁収録)
4. 瓜生秀文編「蔵持古屋敷遺跡」(前原市教育委員会・1993年)
5. 渡辺正弘「神籠石の築造年代」  
(『考古学叢考』中巻・齊藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編・吉川弘文館・1988年)
6. 『筑前怡土雷山千如寺大悲王院』(九州歴史資料館編・1991年)



1. 蔵持境遺跡
  2. 蔵持古瓦歌遺跡
  3. 蔵持蔵持遺跡
  4. 雷山神籠石
  5. 原田種直墓 (八幡宮遺跡)
  6. 一貴山鏡子塚古墳
  7. 釜塚古墳
  8. 上隈子遺跡
  9. 波多江丹波守屋敷
  10. 波多江遺跡
  11. 平塚遺跡
- A. 蔵持遺跡群
  - B. 日明遺跡群
  - C. 東五反田遺跡
  - D. 東遺跡群
  - E. 荻浦遺跡群
  - F. 藤原遺跡群
  - G. 泊志遺跡群
  - H. 志登遺跡群
  - I. 曾根遺跡群

第1図 蔵持境遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

(太線の囲みは主要遺跡群もしくは遺跡、●は墳墓、■は方形の歴史跡を示す。)



第2図 遺跡周辺の地形 (1/5,000)

(■●は前方後円墳、■は方墳、●は円墳を示す。)

### Ⅲ. 調査報告

#### 1. 調査の概要

葦垣遺跡は雷山から伸びる標高約38mを測る丘陵上に立地する。調査地点はその丘陵の頂上部から西側へやや下った部分に位置する。調査地点一帯は調査以前において階段状の畑に造成されていた。そのために、Ⅰ区とⅡ区とに調査区を分けて調査を実施することにした。

発掘調査を実施する以前に畑の耕作土中から多量の遺物が採取できることから、遺構面まではかなり浅いと予測できた。果たして、表土剥ぎの際、両調査区において畑土（耕作土）を除去するとすぐ遺構面が現れた。試掘（事前調査）の結果を考慮して、Ⅰ区は遺構が集中する北側部分を中心に調査区を設定した。Ⅱ区については試掘（事前調査）の際に遺構の分布状況が十分に把握できなかったため、さらに東西方向に2本のトレンチをいれた。その結果、調査区の西側半分がかなり削平を受けていることが判明し、当初の計画を変更して調査区を東側に限定して設置した。Ⅰ区は調査面積約390㎡、Ⅱ区は調査面積約52㎡であり、Ⅰ区とⅡ区をあわせた総調査面積は約442㎡を測る。

調査によって検出された遺構は、Ⅰ区においては掘立柱建物1棟、溝2条、甕棺1基、柱穴多数であった。Ⅱ区は土城1基、柱穴多数であった。両調査区において柱穴は多数検出されたものの、掘立柱建物として確認できたのは1棟のみであった。

#### 2. 調査の記録

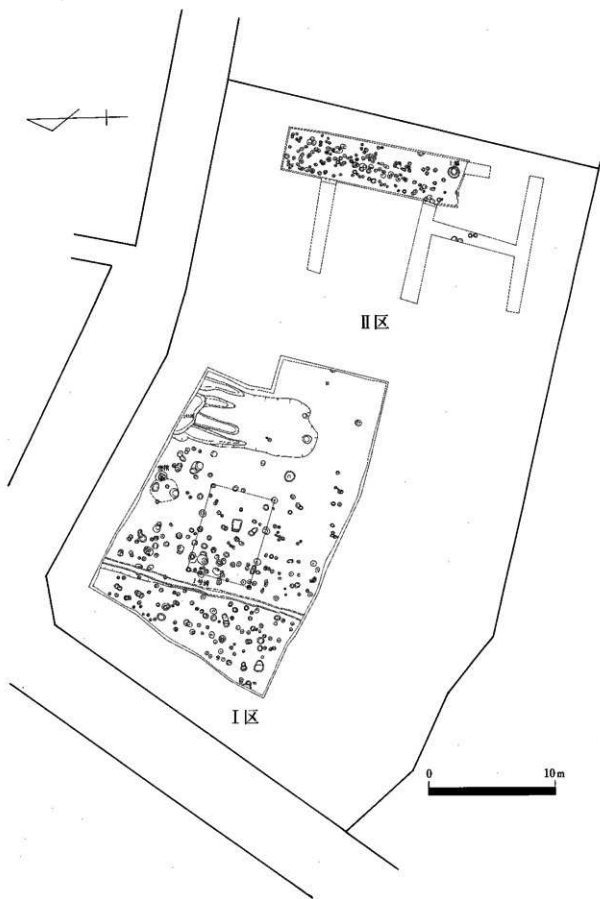
##### (1). Ⅰ区

##### (A). 甕棺（第4図、図版2-a）

Ⅰ区の中央部の北側端部に位置する。表土剥ぎの段階で、甕棺の一部が露出していた。そのため丁寧に遺構の検出を試みたのであるが、後世の削平を著しく受けており、遺構の残存状況は悪かった。甕棺は胴部の一部が地山に張付いた状況で出土した。堀方は確認できず、主軸も不明である。

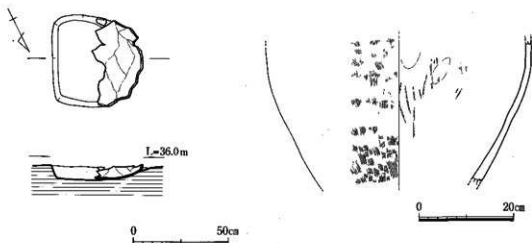
出土した甕棺は胴部的一部分と考えられ、口縁部と底部を欠損する。現存最大長は約27.8cmを測る。厚さは約1.5～2cmを測る。胎土は1～2mmの白色砂粒を多量に含むものの、焼成は良い。色調は胴部内部が淡黄色、胴部外部は明黄褐色を呈する。調整は胴部内部に斜め方向の板状工具跡がある。胴部外部には縦方向および斜め方向の細かいハケ目が施された後にナデ消そうとしているが、底部付近については細かいハケ目が強く残っている。この甕棺は口縁部と底部を欠損し、胴部の一部しか残存していないために、時期は不明である。ただし、縦方向および斜め方向の細かいハケ目が施された後にナデ消そうとしている胴部外部の調整は、弥生後期の甕棺の調整と類似していることを指摘でき、時期として弥生後期の可能性がある。

なお、埋土の中から弥生前期の甕の口縁部が出土している。このことから、かつて当該地一帯には弥生前期の遺構群が形成されたことが想定される。そして、仮にこの甕棺の時期を弥生後期と考えるとその弥生前期の遺構群を削平して弥生後期に新たに甕棺墓群が形成されたと考えるこ



第3図 調査区位置図 (1/300)





第4図 甕棺出土状況及び甕棺実測図 (1/20, 1/8)

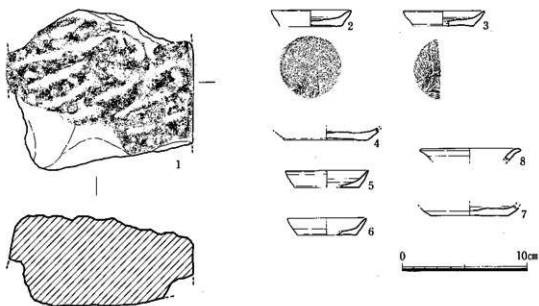
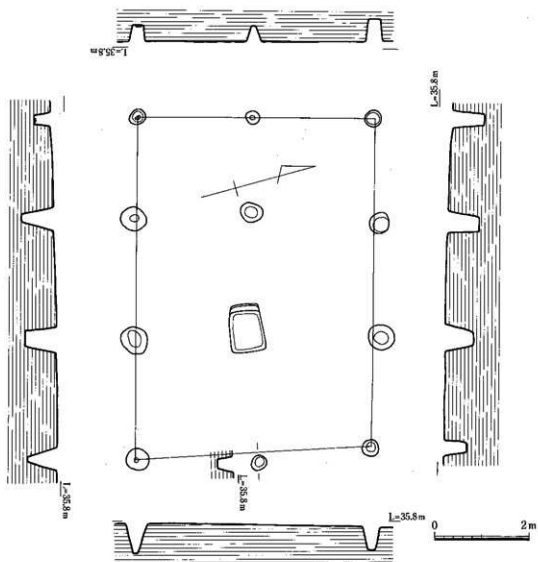
とができる。

(B). 掘立柱建物 (第5岡, 図版2b, 図版5-a)

I区のはぼ中央部に位置する。方形に区画する1号溝を基準として構築されている。2間×3間のプランを呈する。柱の掘り方は円形で深さ約30～60cmを測る。柱穴の1つには柱の高さを調節するために上面が水平に調整された礎石と考えられる石が設置されている。東西方向に主軸を持つ建物で、主軸をN-74°-Wに向けている。桁行は平均して約7mを測り、その柱間の距離の平均値は約2.4mである。梁行は平均して約5mを測り、その柱間の距離の平均値は約2.5mである。

この掘立柱建物の柱穴の中からは多数の出土遺物が出土している。そのなかでも図示可能な遺物だけを概説する。1は石臼の一部である。現存幅14.7cm、現存長12.7cm、現存厚さ7.2cm、重さ1.6kgを測る。表面に溝がある。石臼の下の部分もしくは底面であろう。ただし、周囲を削って整形されており、また表面も少し欠損していることから、他に転用された可能性が高い。なお、下半分は火を受けている。2～7は土師皿である。2は口縁部が約1/4程欠損しているがほぼ完形品に近い状態である。口径6.3cm、器高1.3cm、底径4.9cmを測る。3は約1/2程残存している。復元口径6.4cm、器高1.2cm、復元底径4.7～5cmを測る。4は約1/3程残存している。口縁部を欠損するため、口径、器高は不明である。底部も凸凹があり歪みも著しいため正確な底径は不明である。5は底部の一部を欠損する。復元口径6.5cm、器高1.3cm、復元底径5.0cmを測る。6は底部の一部を欠損する。復元口径6.2cm、器高1.3cm、復元底径4.6cmを測る。7は口縁部を欠損するため、口径、器高は不明である。底径は約6cmを測る。2～7の各土師皿の胎土は1～2mm程の白色砂粒を若干含むものの、焼成は良好である。2～7の各土師皿の器表は内側・外側ともに明黄褐色を呈し、調整は内側にヨコナデ、外側にナデが施されているが風化のため観察しにくいものもある。2～7の各土師皿の底部はすべて糸切り底である。8は白磁の小皿である。復元口径8cmを測る。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は若干黄色味を帯びた灰白色で氷裂はない。

以上、出土遺物と1号溝との関係から掘立柱建物の時期は14世紀～15世紀代と考えられる。



第5図 掘立柱建物及びその出土遺物 (1/80, 1/3)

(C). 1号溝 (第6図, 図版3a, b, 図版5-b)

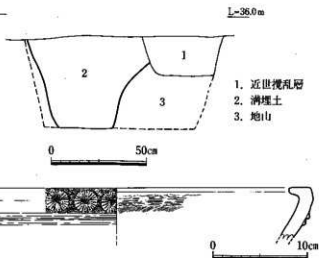
I区の西部に位置し、同調査区をほぼ南北方向に流れている。掘立柱建物は1号溝に平行に構築されていることから、この1号溝は区

西の際の基準となったと考えられる。現存幅約0.7m、現存深さ約0.5mを測る。土層観察の結果、逆台形を呈することがわかる。また、試掘の際に1号溝から東方向にほぼ直角に延びる溝の一部を確認している。このことから、この遺構は方形を呈することも判明している。

1号溝からは若干の遺物が出土した。そのなかでも図示可能な遺物だけを概説する。これは土師質の浅鉢

型の火鉢である。口縁部の一部であり、復元口径41cmを測る。胎土は1~2mmの白色砂粒を多く含むもの、焼成は良好である。器表は内・外側ともに明黄褐色を呈する。調整は内側に横あるいは斜めのハケ目が施され、一部に指痕が残る。口縁部外側に菊花文のスタンプ印が施され、その下部に2条の凸帯をめぐらしている。14世紀~15世紀代の火鉢と考えられる。

以上、出土遺物から1号溝の時期は14世紀~15世紀代と考えられる。

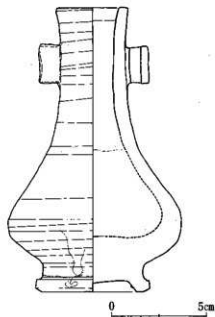


第6図 1号溝土層断面図と出土遺物 (1/20, 1/4)

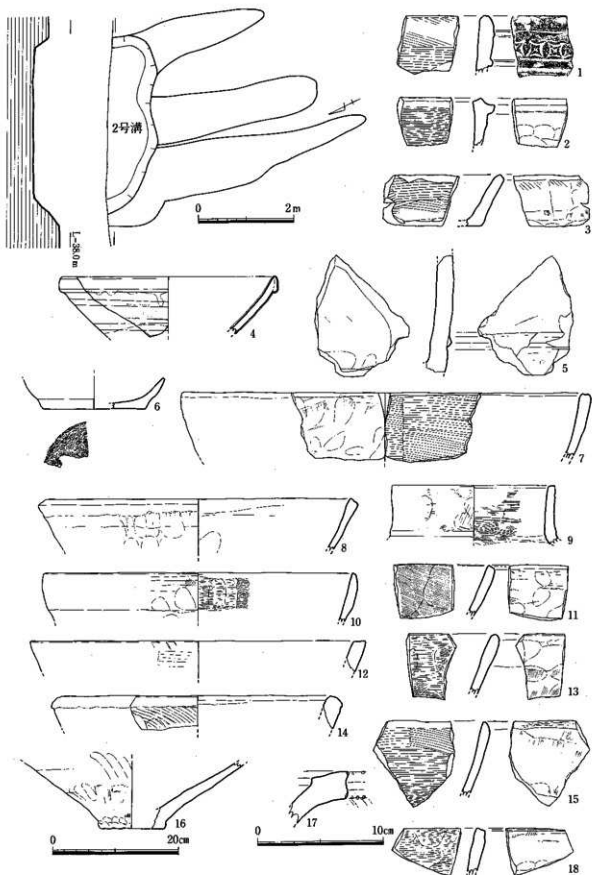
(D). 2号溝 (第7図, 第8図, 図版4-a, b, 図版5-c)

I区の北東部に位置する。現存幅約3.5m、現存深さ約0.4mを測る。調査区の制約のため、2号溝がどのように延長していくかは不明である。そのために、如何なる性格の遺構であったかも不明である。しかし、特筆すべきことに2号溝はI区の遺構群のなかで貿易陶磁器を最も多く出土する遺構であり、この2号溝の最も深い部分から白磁管耳花生が出土している。

白磁管耳花生は高台の一部を欠損するのみにほぼ完形品である。口径約3.8cm、器高15cm、底径6cmを測る。管耳は長径2cm、短径約1.1cmを測るややいびつな円柱状であり、径約6mmの孔が穿たれている。胎土は緻密であるが、空隙が多く、1~2mmの白色粒子を若干含む。灰白色を呈する。焼成は良好である。釉は明オリブ気味の灰白色を呈し、高台上部までかかっている。水裂はない。その形態および焼成等から、14世紀後半~15世紀代の中国製の白磁管耳花生と考えられる。



第7図 2号溝出土白磁管耳花生実測図 (1/2)



第8図 2号溝実測図及びその出土遺物 (1/80, 1/6, 1/3)

2号溝からは白磁管耳花生の他に多量の遺物が出土している。ここでは図示可能な遺物について概説する。1は土師質の火鉢の口縁部である。胎土は1mm程の白色砂粒を含むが、焼成は良好である。器表は内・外側ともに明黄褐色を呈する。調整は内側の上部に斜めのハケ目、下部に横位のハケ目が施されている。外側は深い一条の沈線の下にスタンプ印がおされ、その下に凸帯が一条貼りついている。2は土師質の羽釜である。胎土は3mm程の白色粒子を含み、焼成は良好である。器表は内・外側ともに褐灰色を呈する。調整は内側に横位のくっきりとしたハケ目、外側は指で押さえている。3は土師質の火鉢である。胎土は若干白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表は灰オリーブ色、断面は明黄褐色を呈する。調整は内側に横方向の粗いハケ目、外側は斜めの粗いハケ目の後ヨコナデが施されている。一部に指頭痕が残る。4は白磁碗であり、復元口径17cmを測る。胎土は緻密であり、焼成は良好である。器表は灰白色を呈する。釉は内底から外側上半部までかかる。釉は不透明で水裂はなし。5は瓦質の火鉢である。胎土は1~3mmの白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表の内側は淡黄色、外側は灰黄色を呈する。調整は内側下方に指頭痕、外側には下方に一条の凸帯がつく。6は土師皿で、復元口径約11cm、復元底径約8cmを測る。胎土は1~3mmの白色砂粒を含む、焼成は良好である。器表は内・外側ともに明黄褐色を呈する。調整は器表が摩滅しているため不明である。底部は糸切り底である。7は土師質の鍋であり、復元口径は32.4cmを測る。胎土は1~3mmの白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表の内側は黄褐色、外側はにぶい黄褐色を呈し、スガが付着する。調整は内側に斜めの細かいヨコハケ、外側には板状工具による粗い調整の上に指頭痕が残る。8は土師質の鍋であり、復元口径は25cmを測る。胎土は2~3mmの白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表は内・外面ともに黄褐色を呈する。調整は内側にナデ、外側に指頭痕が残る。9は土師質の湯釜であり、復元口径は12.8cmを測る。胎土は1~2mmの白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表は浅黄色を呈する。調整は内側にハケ目、外側に細かいヨコハケが施され、一部指頭痕が残る。10は土師質の鍋であり、復元口径は約25cmを測る。胎土は細かい白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側に細かいヨコハケ、外側に指頭痕が残る。11は土師質の鍋と考えられる。胎土は細かい白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表はにぶい黄褐色を呈する。調整は内側に細かいヨコハケ、外側に板状工具で横方向にナデた後に指でさらにナデている。12は土師質の鉢と考えられる。復元口径は約26.4cmを測る。胎土は細かい白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側にナデ、外側に粗いヨコハケが施されている。13は土師質の鉢と考えられる。胎土は細かい白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表は内側が明黄褐色、外側が灰黄色を呈する。調整は内側に細かいヨコハケ、外側には粗いハケ調整の後にナデが施されている。14は土師質の鉢と考えられる。復元口径は約22.8cmを測る。胎土は細かい白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側については不明、外側は粗い斜めのハケの後に指で調整されている。15は土師質の鍋である。胎土は細かい白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表の内側は黄褐色、外側は暗灰黄色を呈する。調整は内側にヨコハケ、外側にはヨコハケが施されている。16は甕棺（弥生前期）の底部である。底径は約10cmを測る。胎土は1~5mm程の白色砂粒を含む。焼成は良好である。器表の内側は淡黄色、外側は灰黄色を呈する。調整は器表の摩滅のため不明である。17は甕棺（弥生前期）の口縁部である。ただし、16とは別固体である。18は土師質の鉢と考えられる。胎土は細かい白色砂粒を含む、焼成は良好である。器表は灰黄色を呈する。調整

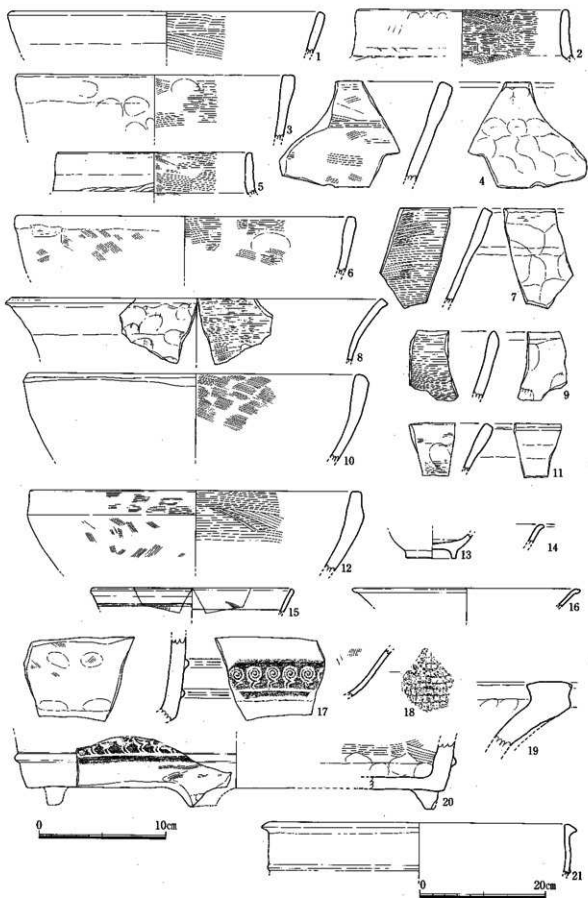
は内側にヨコハケ、外側はナデが施されている。

以上、出土遺物から2号溝の時期は14世紀～15世紀代と考えられる。

(E) I区柱穴群出土遺物・その他の遺構からの出土遺物 (第9図、図版5-d)

I区の柱穴群およびその他の遺構から多量の遺物が出土した。ここでは図示可能な遺物について概説する。1～20は柱穴群、21は甕棺の埋土から出土している。

1は土師質の鍋で、復元口径約25cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は灰黄褐色を呈する。調整は内側にハケ目が施されている。外側は器表の摩滅のために不明。2は土師質の湯釜で、復元口径16.8cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表の内側はにぶい黄色、外側は暗灰黄色を呈する。調整は内側にハケ目、外側に指頭痕が残る。3は土師質の鉢で、復元口径約22cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表の内側は明黄褐色、外側は褐灰色を呈する。調整は内側にヨコハケの上に指頭痕、外側に指頭痕が残る。4は土師質の土鍋である。胎土は2mm程の白色粒子を含む。焼成は良好である。器表は浅黄色を呈する。調整は内側にヨコハケ、外側に指頭痕が残る。5は土師質の湯釜であり、復元口径約15.4cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は灰黄褐色を呈する。調整は内側に細かいハケ目、外側にヨコナデが施されている。6は土師質の鉢であり、復元口径26.8cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表はにぶい黄橙色を呈する。調整は内側にヨコハケの上に指頭痕、外側にハケ目の上に指頭痕が残る。7は土師質の土鍋である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は暗灰黄色を呈する。調整は内側にハケ目、外側に指頭痕が残る。8は土師質の土鍋であり、復元口径30cmを測る。胎土は2mm程の白色粒子を含む。焼成は良好である。器表の内側は浅黄色、外側は暗灰黄色を呈する。調整は内側にヨコハケの上に指頭痕、外側にハケ目の上に指頭痕が残る。9は土師質の鍋である。胎土は2mm程の白色粒子を含む。焼成は良好である。器表は褐灰色を呈する。調整は内側にヨコハケ、外側にハケ目の上に指頭痕が残る。10は土師質の鉢であり、復元口径27cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側にハケ目が残る。外側は器表の摩滅のため不明。11は土師質の鍋である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側にヨコハケの上に指頭痕が残る。外側は不明。12は土師質の鉢であり、復元口径26cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表の内側はにぶい黄橙色、外側は褐灰色を呈する。調整は内側に粗いヨコハケ、外側に細かいヨコハケが施されている。13は白磁小碗であり、底径4cmを測る。胎土に空隙がみられる。釉は浅黄色を呈し、細かい氷裂が入る。14は白磁碗である。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は灰白色を呈し、氷裂はない。15は青磁碗であり、復元口径16cmを測る。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は浅黄色を呈し、氷裂はない。16は白磁碗であり、復元口径約18cmを測る。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は灰白色を呈し、氷裂はない。17は土師質の火鉢である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表はにぶい黄褐色を呈する。調整は内側にハケ目と指頭痕が残る。外側は2条の凸帯がめぐり、スタンプ印が押されている。18は鍋の一部である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表の内側は暗灰黄褐色を呈し、外側はススが付着している。調整は内側にハケ目、外側に格子の叩き目がある。19は甕棺(弥生前期)の口縁部である。胎土は粗く、3mm程の白色砂粒を多く含む。焼成は良好である。器表は淡黄色を呈する。調整は内側にヨコ



第9図 I区柱穴群出土遺物及びその他の遺構出土遺物 (1/3, 1/6)

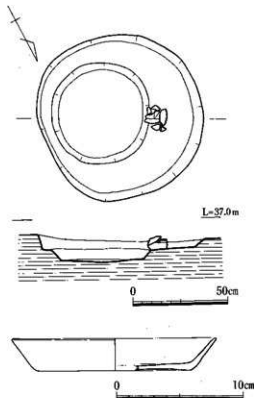
ハケと指頭痕が残る。外側は器表の摩滅のため不明。20は土師質の火鉢（脚付）であり、復元底径は約33cmである。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は灰黄褐色を呈する。調整は内側に粗いヨコハケと指頭痕が残る。外側に1条の凸帯をめぐらし、スタンプ印が押されている。21は甕（弥生前期）であり、復元口径50.4cmを測る。胎土は粗く、4mm程の白色砂粒を含む。器表は明黄褐色を呈する。調整は器表が摩滅して不明である。

## (2). II区

### (A). 土壌 (第10図, 図版6-b, 図版7-a)

II区の南東角部に位置する。平面プランは円形を呈し、二段のテラスからなる土壌である。現存径約90cm、一段目のテラスの深さ約10cm、二段目のテラスの深さ約10cmを測る。一段目のテラスから土師器(坏)が1点出土した。

土師器(坏)は復元口径16cm、器高2.5cm、復元底径約11.8cmを測る。胎土はきめ細かく、1~3mm程の白色粒子を若干含む。焼成は良好である。器表は黄橙色を呈する。調整は器表の摩滅が著しく不明である。底部には板状圧痕と糸切り痕も残っている。底部の調整からこの土師器(坏)の時期は鎌倉時代前期と考えられ、土壌の時期も鎌倉時代前期と考えられる。



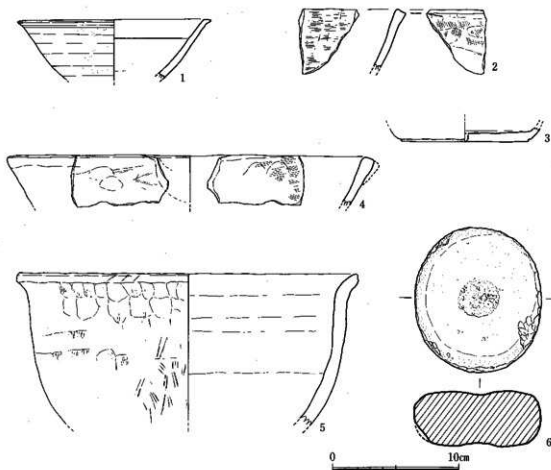
第10図 土壌実測図及びその出土遺物 (1/20, 1/3)

### (B). II区柱穴群出土遺物 (第11図, 図版7-b)

II区の柱穴群から多量の遺物が出土した。ここでは図示可能な遺物について概説する。

1は白磁碗である。復元口径15.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、空隙がある。釉は灰白色を呈し、氷裂はない。ただし、釉のびは悪くピンホールが多い。2は土師質の土鍋である。胎土は1~2mm程の白色粒子を多く含む。焼成は良好である。器表の内側は黄褐色を呈し、外側はススが付着しているため不明。調整は内側に細かいヨコハケ、外側に指頭痕の上に板状工具によるナデがみられる。3は土師皿の底部である。復元底径約10cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は器表の摩滅が著しく不明である。底部は糸切り底である。4は瓦質の播鉢と考えられる。復元口径約27.4cmを測る。胎土は2~3mm程の白色粒子を多く含む。焼成は普通である。器表は灰白色を呈する。調整は内側に指頭痕の上にヨコハケ、外側に指頭痕が残る。5は弥生前期の甕である。復元口径約26.8cmを測る。胎土は1~4mm程の白色粒子を多く含む。焼成は普通である。器表の内側は黄褐色、外側は褐色を呈する。調整は内側にヨコナデが施されている。外側は口縁部に指頭痕が残る。6は磨製石器の叩石である。縦11.4cm、横10cm、厚さ4.5cm、重さ840gを測る。表裏両面磨かれている。まわりの側面は敲打痕や磨痕がある。石材は砂岩と考えられる。



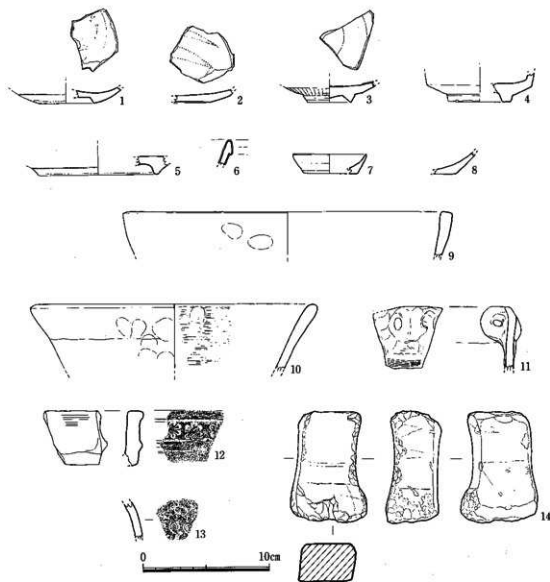


第11図 II区柱穴群出土遺物 (1/3)

(3). I区・II区の表土採集遺物 (第12図, 図版7-c)

I・II区において表面採集された遺物をここで概説することにする。

1は葎筒底の皿の底部であり、底径4.4cmを測る。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は内底から外底近くまでかかり、氷裂が入る。2は青磁の平底皿の一部である。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は淡灰青色を呈し、氷裂はない。平らな広い見込みに描繪文がある。3は白磁の高台付皿の底部であり、高台径3.6cmを測る。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は見込みにかかり、蛇ノ日に釉ハギをしている。4は陶器の小鉢の小皿と考えられ、底径5.2cmを測る。胎土は緻密である。釉は現況で外側と高台内側にかかり、細かな氷裂がある。5は染付け皿の底部である。胎土は緻密であり、白色を呈する。釉は見込みと外底・高台内側にかかり、氷裂はない。6は白磁碗の口縁部である。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。釉は灰白色を呈し、細かな氷裂が入る。7は土師皿である。復元口径5.8cm、復元器高1.5cm、復元底径4cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内・外側ともにヨコナデが施されている。8は土師皿である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側にナデ、外側にヨコナデが施されている。底部は糸切り底である。9は土師質の鉢と考えられる。復元口径26cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は黄橙色を呈する。調整は外



第12図 I区・II区の表土採集遺物 (1/3)

側に指頭痕が残る。内側は器表の摩滅が著しいため不明である。10は土師質の鉢と考えられる。復元口径22.6cmを測る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側に細かいヨコハケの上に指頭痕、外側に指頭痕が残る。11は土製内耳鐃の耳である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は黄褐色を呈する。調整はヨコハケの上にナデが施されている。12は土師質の火鉢である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は内側にハケ目が施されている。外側はスタンプ印が押し、一条の凸帯をめぐるしている。13は土師質の火鉢である。胎土は緻密であり、焼成も良好である。器表は明黄褐色を呈する。調整は外側にスタンプ印(渦巻文)が押しされている。内側は器表の摩滅が著しく不明である。14は砥石である。長さ8.7cm、最大幅6cm、厚さ3cm、重さ240gを測る。側面4面を砥石として使用している。石材は砂岩と考えられる。

## IV. おわりに

「甬山高齢者いこいの家」の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果、蔵持地区における弥生～戦国時代にかけての情報が得られた。なかでも、室町～戦国時代の掘立柱建物群は区画のための方形の溝を伴い、その内部から貴重な貿易陶磁器が出土している。以下、室町～戦国時代の掘立柱建物群を中心に各時代ごとの遺構と蔵持古屋敷遺跡検出の屋敷跡との関係についてまとめておく。

### 1. 弥生～鎌倉時代

弥生時代の遺構としてはⅠ区から甕棺墓1基を検出している。この甕棺はかなり削平を受けており、胴部から底部にかけての一部しか残存していなかった。そのため不明な点は多い。ただし、甕棺埋土内に古墳時代の土師器片・貿易陶磁器片が混入している。このことから、当該地帯にはかつて甕棺墓群が営まれていたことが想定され、後世において数次にわたる造成がなされ、かろうじてⅠ区の一部に甕棺1基の一部分が残存していたと考える。

古墳～鎌倉時代にかけての遺構はⅡ区から土壇1基のみ確認できた。また、Ⅰ区・Ⅱ区の柱穴群の埋土内に古墳時代の土師器片・奈良時代の須恵器片・貿易陶磁器片を包含することから、かつて当該地帯には古墳～鎌倉時代の遺構も存在したと考えられる。これも後世の造成のため消滅してしまったのであろう。

### 2. 室町～戦国時代

今回の調査で検出した遺構のうち室町～戦国時代（14世紀～15世紀代）のものが大部分を占める。室町～戦国時代（14世紀～15世紀代）の遺構は掘立柱建物群が中心であり、区画のための方形の溝を伴う。その方形の溝を基準にして掘立柱建物群は形成されている。復元可能な掘立柱建物は2間×3間のプランを呈し、その柱穴間は約2.4m（8尺）を測る。この掘立柱建物は蔵持境遺跡の中核的建物と考えられることから、当該遺跡の掘立柱建物群の柱間寸法の基準尺の一つは8尺であったと考えられる。当該遺跡の掘立柱建物群はその基準尺に基づいて構築されており、規格性に富んだ遺構群であることがわかる。なお、下時期は下がるが、波多江遺跡の基準尺の一つに8尺が含まれていることから、14世紀～16世紀代において、糸島地方では、区画する溝を伴い、規格性を必要とする特別な屋敷等の建築の際には基準尺の一つとして8尺が使用されていたことが想定される。

また、蔵持境遺跡の室町～戦国時代（14世紀～15世紀代）の遺構からは多くの貿易陶磁器が出土している。その蔵持境遺跡から出土した貿易陶磁器のなかでも白磁管耳花生は蔵信財の一部と考えられる。蔵持境遺跡から出土した白磁管耳花生は器高15cm、最大胴径9cm、口径約3.8cm、高台径6cmを測る。14世紀後半から15世紀代の中国製の白磁の花生と考えられる。形態としては頸部の両側に管耳をもち、1331年から1350年の間に中国（元）から済州島經由で日本に向かう途中、朝鮮半島の新安（現在の韓国、全羅南道新安郡智島面防築里に属する道徳島沖）で沈没した貿易船から発見された遺物（青銅管耳瓶）と酷似している<sup>2</sup>。現時点において、類似した遺物は国内では朝倉氏の拠点である一乗谷朝倉氏遺跡から頸部の両側に管耳をもつ青磁の花生（青磁管耳花生）

が数点出土しているにすぎない。

以上の2点から、蔵持境遺跡の室町～戦国時代（14世紀～15世紀代）の掘立柱建物群は規格性に富む掘立柱建物群であり、そこで生活を営んでいたのは威信財、それも中国との貿易でしか人手でできない貴重な貿易陶磁器をもつことができた階層の人々である。当時の糸島地方の情勢を考慮に入ると、蔵持境遺跡の室町～戦国時代（14世紀～15世紀代）の掘立柱建物群は当時糸島地方を支配していた「原田氏」に関連のある一族の屋敷跡と想定できる。

### 3. 蔵持古屋敷遺跡検出の屋敷跡と蔵持境遺跡の屋敷跡との関係

蔵持遺跡群において蔵持境遺跡の屋敷跡とほぼ同時期の屋敷跡に蔵持古屋敷遺跡検出の屋敷跡がある。この項では蔵持古屋敷遺跡検出の屋敷跡と蔵持境遺跡の屋敷跡との関係について考えることにする。蔵持古屋敷遺跡は蔵持境遺跡の南側約250mに位置する。遺構は現存幅3m、現存深さ1.3mを測るV字形の溝（2号溝）が検出されている。そのプランは方形を呈し、一辺約30mを測る。また、溝がとり囲む領域端部に土塁がめぐり、その一角に掘立柱建物（物見櫓か）が所在した可能性がある。時期は14世紀～15世紀代と考えられ、防衛的機能を重視した屋敷跡である。溝がとり囲む内部については後世の削平が著しいためにその子細については不明である。

一方、蔵持境遺跡の屋敷跡をとり囲む方形の1号溝は現存幅約0.7m、現存深さ約0.5mを測る逆台形の溝であり、防衛のためというより区画のための溝である。溝がとり囲む内部については1号溝を区画の基準として掘立柱建物群が形成されている。

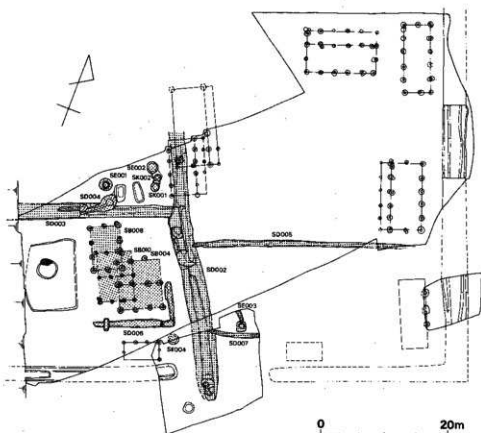
出土物についてみると、日常生活で使用する生活雑器については蔵持境遺跡の屋敷跡の方がその種類・出土量において蔵持古屋敷遺跡の屋敷跡を凌いでいる。貿易陶磁器は両屋敷跡から出土するものの、特筆すべきことに蔵持境遺跡の屋敷跡からは威信財の一部と考えられる白磁管耳花生が出土している。

以上から、ほぼ同時期に形成された蔵持古屋敷遺跡の屋敷跡と蔵持境遺跡の屋敷跡は遺構の機能が大きく異なっていたと想定される。すなわち、蔵持古屋敷遺跡の屋敷跡は有事の際に備えるための軍事要塞的な施設であり、蔵持境遺跡の屋敷跡は「会所」的な機能を有する施設と考えられる。

このことから、平和な時に蔵持境遺跡の屋敷跡で生活を営み、有事の際には蔵持古屋敷遺跡の屋敷跡に逃げ込んで敵に備えたと考えることができる。

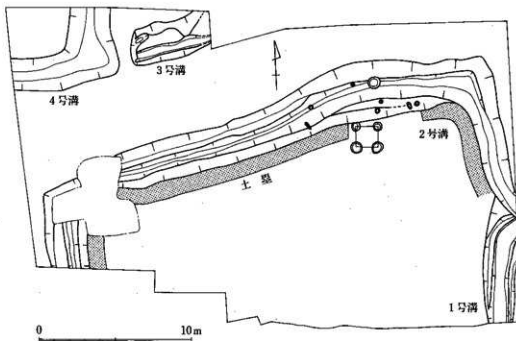
#### 参考文献

1. 「波多江遺跡」（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集・福岡県教育委員会・1982年）
2. 大場康時氏（福岡市教育委員会）・森本朝子氏（福岡市教育委員会）から御教示を賜った。
3. 「新安海底遺物」（韓国文化広報部文化財管理局編・1983年）
4. 「特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡Ⅴ」（福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館・1984年）
5. 「蔵持古屋敷遺跡」（前原市文化財調査報告書第46集・前原市教育委員会・1993年）



第13図 波多江遺跡遺構図（戦国期）（1/600）

〔波多江遺跡〕（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集・福岡県教育委員会・1982年）より転載



第14図 蔵持古屋敷遺跡遺構図（室町～戦国期）（1/250）



# 圖 版







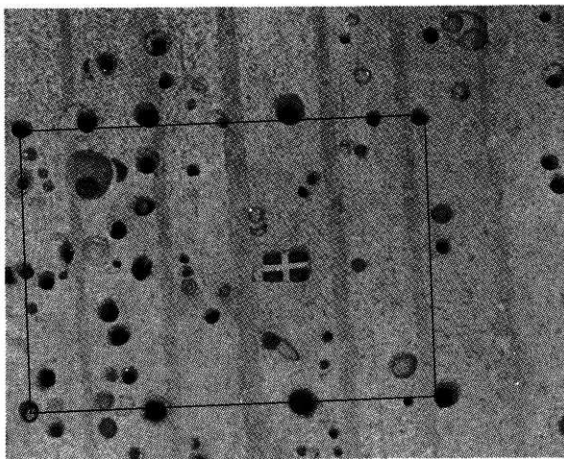
a. I区·II区全景



b. I区全景



a. 甕棺出土狀況



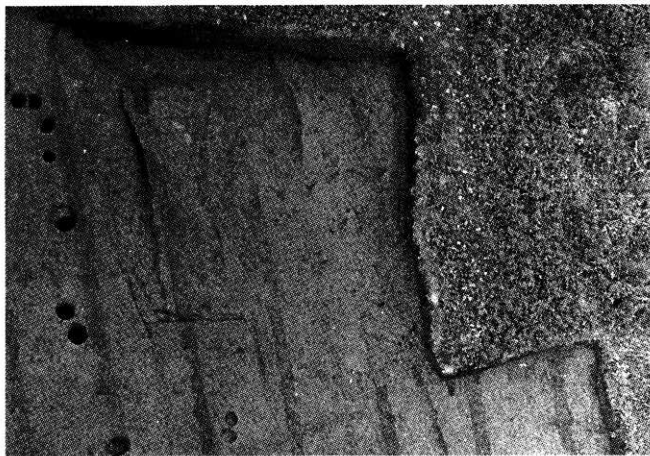
b. 掘立柱建物



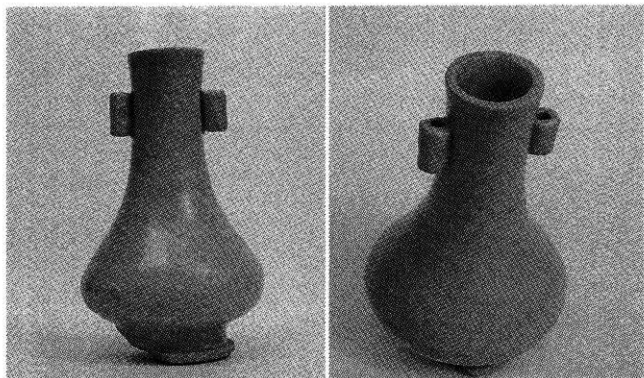
a. 1号沟全景



b. 1号沟土层断面



a. 2号沟全景



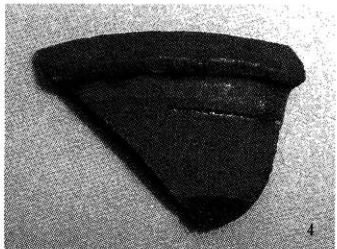
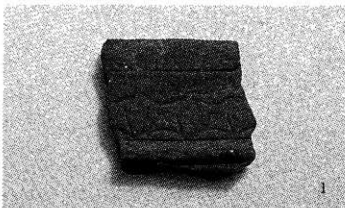
b. 2号沟出土白磁管耳花生



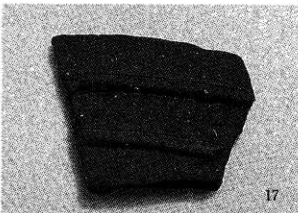
a. 掘立柱建物出土遺物



b. 1号溝出土遺物



c. 2号溝出土遺物



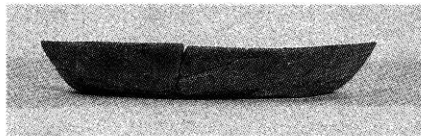
d. I区柱穴群出土遺物



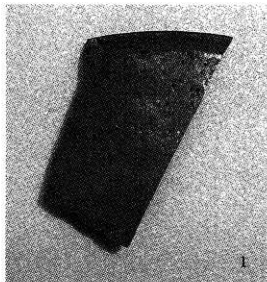
a. II区全景



b. 十城全景



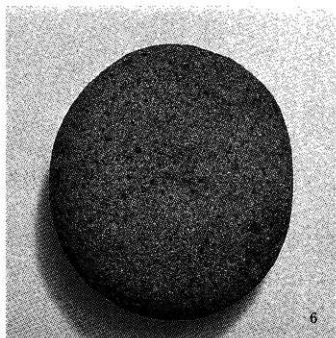
a. II区土壌出土遺物



1

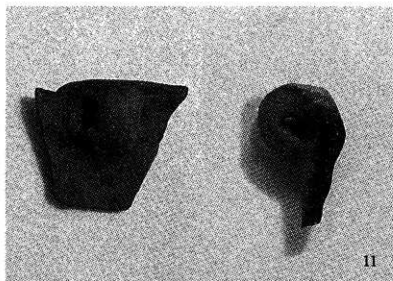


5

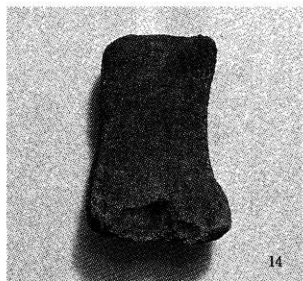


6

b. II区柱穴群出土遺物



11

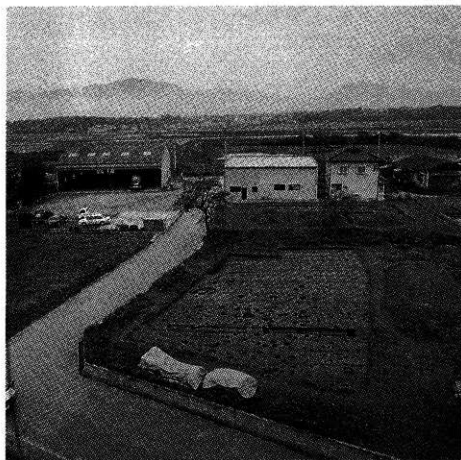


14

c. I・II区の表土採集遺物



a. 藏持古屋敷遺跡2号溝（東部）



b. 藏持境遺跡より高祖城を望む（西より）



## 報告書抄録

ふりがな	くらもちさかいいせき							
書名	蔵持境遺跡							
副書名	蔵持高齢者いきいの家建設に伴う文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第74集							
著者名	瓜生秀文							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市前原西一丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2001年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くらもちさかいいせき 蔵持境遺跡	福岡県前原市 大字蔵持字境 857-3, 860-1	40222		33° 32' 13"	130° 13' 17"	2000.09.11 ↓ 2000.11.17	442㎡	公共事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
蔵持境遺跡	住居跡	平安～戦国期	堀立柱建物群	土師器、陶磁器				

### 蔵持境遺跡

前原市文化財調査報告書 第74集

2001年3月31日

発行 前原市教育委員会  
前原市前原西一丁目1番1号

印刷 (有)システム・レコ  
福岡市東区十井1丁目11-7





